

成果報告書

長谷部葉子研究会コンゴ民主共和国プロジェクト

総合政策学部4年 佐藤美乃

総合政策学部3年 市口みどり

総合政策学部1年 丸山美羽

2024年8月22日から2024年9月8日迄、アフリカ中部に位置するコンゴ民主共和国へ教員1名、学生5名で渡航した。長谷部葉子研究会コンゴ民主共和国プロジェクトとしては、最後に渡航した2019年からプロジェクトメンバーと教員全員での渡航が安全面の諸条件が整わず、実に5年ぶりの現地での実践的研究活動となった。

本研究助成申請に於いて当初は、2011年日本政府の草の根文化無償の助成金に採択され、日本語教育及び武道を含む文化交流活動の拠点として建設されたCongo Japan Complex（コンゴ x 日本語文化交流センター）（以下CCJ）を主な拠点として活動すると申請していた。しかし、本年3月にコンゴ側の諸事情により建物がなくなってしまい、拠点を換え、名称も『Japan Corner』と変更した。だが、名前や拠点は変わったものの、活動を共にする人は変わらず、私たちはまた彼らと共に今回も研究活動を行ったため、申請当初の通りここに成果報告書を作成する。

今回の渡航では、Japan Cornerでの活動以外にも、長谷部葉子研究会コンゴ民主共和国プロジェクトの原点であるACADEX小学校での『Japan Culture Day』という日本文化を体験できるイベントの開催や、APROFEDという、女性やストリートチルドレンの支援活動を主としているNGOへのインターンも行うことができた。尚、学生の滞在先は、Japan Cornerでマネージャーを勤めるJeandie Ilonga氏(以下Ilonga氏)と、現地で漫画を制作し、本年1月から2月には日本研修で日本に1ヶ月滞在していた『Bantu Studio』のリーダーの2拠点に別れ、ホームステイを行った。以下に2週間の滞在をまとめる。

1. Samedi au Japonの開催

- a. コンゴで日本文化を体験できるイベントを「Samedi au Japon」と称し、コンゴと日本で共同開催した。当日は、1人の学生が強みとするそろばんやお箸、折り紙のワークショップを行い、日本に関心のあるコンゴ人30人以上が参加した。参加者たちに日本食を食べてほしいという願いから、前日の夜にカレーライスと天ぷらを50人前ずつ作った。電気やガスが当たり前に使えない国で料理をすることの難しさを感じたとともに、コンゴと日本で共に一つのものを作り上げるという“協働”によって、揺るがない信頼関係が築かれていくことも感じた。

2. Academic Camp実施

- a. 日本とコンゴ民主共和国の持続的なコラボレーションを実現するため、4日間にわたるAcademic Campを行った。このキャンプには日本のビジネス、文化に関心を持つ約25名のコンゴ人が集まった。参加者と学生はワークショップを通して、相互の文化や考え方を理解し、コラボレーションの本質を知ることが目的として行われた。午前には日本人学生のワークショップが行われ、午後は長谷部葉子准教授によるコラボレーションに関する講義やグループごとの議論が実施された。
まず初日は、日本を知ってもらうための「おもてなし」として日本人学生がソーラン節と日本の歌2曲を披露した。2日目3日目は参加者をグループ分けし、午前中の2時間を使いワークショップを行った。学生が一人一つ自分の興味分野のワークショップを持ち、ファッション、農業、物語、ボードゲーム、アートとダンスの5グループで行った。言語の壁は感じたが、

ジェスチャーや翻訳アプリを活用し、コミュニケーションを取った。お昼ご飯も一緒に食べ親睦を深めた。長谷部准教授の授業ではグループでのMissionやInnovative Processについて話し合い、活発な意見交換が行われた。3日目はグループ内でディスカッションを行った。最終日には、各グループの最終発表を行った。発表の形式は様々でファッションショーやスゴロク、紙芝居、踊りなど創造的な方法で行われた。4日間を通して、参加者も日本人メンバーも言語の壁も感じなくなり、より深く交流することが出来た。今でもオンライン参加者との交流は続いている。多くの参加者から「また参加したい」「もっと長い期間でやりたい」という声もたくさん頂き、両国にとって価値ある時間となった。

3. Japan Culture Day at Acadex

- a. コンゴプロジェクトの発端である学校「Acadex」にてJapan Culture Dayを開催した。目的はAcadexに通う生徒に日本の文化を知ってもらい、体験してもらうことだ。200人以上の中学生以下の生徒が集まった。初めに日本人学生がAcademic Camp同様、ソーラン節を披露。その後、射的、ヨーヨー掬い、ソーラン節の3つのブースに別れてイベントを行った。生徒達は初めての物、音楽、体験に興味津々で、楽しそうに参加していた。最後には、ソーラン節やコンゴの伝統的なダンスと一緒に踊った。ここ数年はAcadexとの関係が薄れつつあったが、5年ぶりに学校を訪れてイベントを開催したことで、Acadexとのコラボレーションを再開するきっかけになった。先生方からも、今後も毎年開催してほしいという声を頂いた。

4. Aprofed訪問

- a. 女性やストリートチルドレンの支援活動を主としているNGO「APROFED」で3日間のインターンを行った。APROFEDを設立したセシール氏のお宅にホームステイをさせて頂いた。リプタと呼ばれるコンゴの布生地を使った服飾の制作支援が行われている場所を訪問したほか、APROFEDが2015年に設立された小学校「MELODIA SCHOOL」にも訪れた。訪問の際には、APROFEDで働いている方にインタビューを行い、行っている作業や、働くようになった経緯について聞くことができた。APROFEDでは女性やストリートチルドレンに対して裁縫やメイクアップなどのスキルトレーニングを行い、働く人々の自律を図る就労支援を行っていることを実感した。

5. 在コンゴ日本大使館、及びコンゴ民主共和国JICA事務所訪問

- a. 在コンゴ日本大使館、及びコンゴ民主共和国JICA事務所を訪問した。また、別日には在コンゴ日本大使館小川大使公邸、JICA事務所所長の興津さん宅にお招きいただいた。コンゴプロジェクトが最後に渡航してから5年もの年月が経っている為、関係性を紡ぐという意味でも大切な訪問となった。

私たち日本人はコンゴの人のサポートなしに動くことはできない。日本人がそこにいてだけで迷惑をかけているはずにも関わらず、限られた時間の中で学生たちに実りある時間を、と多くのコンゴの方が動いてくださった。彼らは口では「何もしていない」と言いながら、2週間絶えず私たち日本人のサポートをし続けてくれた。これは築いてきたコンゴと日本の関係性がコロナという大きな障壁によっても薄れなかった何よりの証拠である。この滞在を通し、私たちは両国の揺るぎない関係性、繋がりの強さを感じた。、私たちはこのプロジェクトの持続性の先に大きな両国のパートナーシップの結実を見据え、今後も活動を継続する。

最後に

今回の渡航費用を援助して下さいました慶應SFC学会の皆様に深く御礼申し上げます。